シルラーが美學上の功績

深田康算

哲學者であると共に詩人であつた所のシルラーの藝術論若しくは美學は、一面に於てはそれが藝術家の自己反省の上に基けるものとして、所謂藝術家の美學として、レオナルド・ダ・ヰンチの畫論やレッシングの諸評論やフロベールの書翰集やドラクロアの日記などと同じやうに、吾々に取つて特に重要なる價値を有する。併し他面に於ては、其上になほ彼の美學は、他面に於ては、美學の中心問題を取扱つてゐる點に於て、一つの組織立てられたる學說である點に於て、卽ち單に美學の材料を提供してゐるに止まらず、其自身一つの美學である點に於て價値を有する。普通に說かれてゐる所に從へば、シルラーの名は美學史に於ては、或は美的假象論や遊戲衝動說に結び附けられ、或は又美育論や「素朴的」と「感傷的」との分類に結び附けられてゐる。斯くしてシルラーは或はハルトマンの假象論の根源であるとも云はれ、スペンサーの遊戲論と同一視もせられ、或はルッソーの藝術否定說に對して優れたる藝術辯護を與

へたものとも見られ、或は又シュレーゲル(A. W. Schlegel)に依つて定立されたロマンチックとクラシックとの分類の先驅者であるとも考へられてゐる。彼の美學上の效績は――勿論其等の點にも在るに相違ないが――併し、其等の諸點に於けるよりも、なほ一層中心的な、なほ一層根本的な所に見出さるべきであらう。

或意味に於て、さう云ふ中心的な若しくは根本的な點に、美學上に於けるシルラーの效績を認めた人はヘーゲルであつた。ヘーゲルは彼れの美學講義(第一卷七八頁以下)に於て「カントの思惟の主觀性と抽象性とを突破した大なる效績はシルラーに歸せられなければならぬ……シルラーは美のより深き性質に、さうして美の概念に突き入つた」と云つてゐる。クーノー・フィッシャーも亦ヘーゲルに從つて、かゝる效績をシルラーに歸してゐる(フィッシャー「哲學者としてのシルラー」二七三頁以下、及び近世哲學史第八卷の中ヘーゲルの美學の序論を叙説する條下參照)。ヘーゲル及フィッシャーに依ればシルラーの效績はカントの美學を體系的意味に於て突破し超越した點にあるとされるのである。詳しく云へば、カントは美に主觀性を認めるに止まつてゐたのに反して、シルラーは美の概念に客觀性を附與することに依り、カ

ントの主觀主義を正當に突破し得たとせられるのである。吾々は勿論ヘーゲルが自己の立場から(カントを、さうして又―)シルラーの言說を解釋して、シルラーの用ゐた言葉や詩句や文章をヘーゲル風に意味づけることに反對するものではない。併しシルラー自身が果してカントを超越したと云へるであらうか、シルラーは果して美の概念に客觀性を附與し得たと云へるであらうか、一言にして云へば、カントの美學を超越したと云ふ體系的效績をシルラーに認めることが出來るであらうか。それは甚だ疑はしいと思はれる。又ヘーゲルもフィシシャーも孰れも彼等の斷案を支持するのに十分な論據をば明示しては居らぬのである。(その點でランゲ (F. A. Lange) がフィッシャーの「哲學者としてのシルラー」を評して、人を惑はす明瞭さと整然さとを以て書かれてゐると云つてゐるのは適評である。K. Vorländer, Kant Schiller Goethe, 1907, S. V—VI.)

吾々の見る所に依れば、シルラーは徹頭徹尾カント學徒である。カントの學說の多少の變更は彼に認められる、併し原理的突破は之れを見出すことが出來ない。多少の變更が彼に認められるのは、カントとシルラーとの關心の相異から說明し得るであらう。カントが先驗哲學者として體系的興味の上に立つのに反し、シルラー

は云はゞ藝術哲學者として何處までも藝術そのものに、藝術的對象に、興味を有するのである。さうして恰も此對象的興味から育くまれたとも見るべき美の客觀的概念の搜索(―其れの確立は一時シルラーの哲學的欲望であつた、さうして彼は一時其れの確立をも信じ、又其に依つてカントを突破し得たとも信じたのであつたが―)は實はシルラーの誤解に(―正直に云へば實に驚くべき誤解に―)基く無益なる努力であつたに過ぎない。私はシルラーに於て吾々は唯カント學說の變更を見出す、併し原理的突破を認めることはないと斷言したい。曾て私はシルラーの效績を以てカントがimpliciteに意味せしに止まる所のものを徹底的に組織立てた點にあると云つたが(本誌五月號所載「道德美」參照)併しさう云つたのは實はまだ十分嚴密な評價とは云へない、少くとも尙說明を附加すべき必要があるやうである。嚴密に云へばシルラーは寧ろカントの中に原理的に體系的に存在するもの、困難なる發見者の若しくは開拓者の迂餘曲折せる仕事の中に於て手近かに目の前に橫つてゐる如くには與へられて居らぬもの、併し決して單にimpliciteに與へられてゐるに止まるのではない所のものを取り出したのである。其點から云へば、シルラーの效績は、飽くまでもカント學徒として、カントの本質的なるものをあの紛糾せる仕事の中から抽出して、純

粹なる姿に於て、若しくは單純化されたる姿に於て、それを提示した點に存する。斯かる提要的事業は、併し、ウイルヘルム・フォン・フンボルトが、カントの弟子の中最も能くカントを解せるものと評したシルラーに依つて始めて可能だつたのであり、シルラーの性格と頭腦との特徴は恰も此事業に彼を運命づけてゐたとも云へる。シルラーの美學上の業績の檢査は實にカント美學へ向つての最も好い手引なのである。併し其れと同時に、シルラーは、カントの本質的なるものを捕捉することに依り、カントに於ては徹底されては確かにゐない所のものを徹底せしめてゐる。一言にして云へば、カント美學の提要者であると同時に又それの徹底者であると云ふ點に於て、私はシルラーの效績を認めようとするのである。シルラーはカントから一歩も出づることなしに、カントを徹底せしめたと云へる。此一見不思議なる評價は、併し、カントの企てた仕事が如何に困難なものであつたか、さうして第三「批判」が如何に紛糾せる形に於て吾々に與へられてゐるかを知つてゐる者に依りて理解されるであらう。シルラーの效績の價値は此評價に依りて增しはするとも、減ずるものでは決してない。カントを徹底させるために必要であつたことは、何ものかを彼に附け加へることではなくして、寧ろ種々なるものを彼から除くことであつたとも云へや

う。さうであるからして又、カントを徹底せしと　ルラー自身が若し(彼の美學の完成期に於て)最早カントを突破したその意識をも持たず、加之、カントを徹底せしめたのだと云ふことをさへも意識せずに、唯自らを以てカント學徒であると言明したとしても、それは少しも怪しむには足らないことであらう。

「美の客觀的概念を見出した」とシルラ！が初め——誇りを以て——考へたことは事實である。自分をカント哲學と近附きにならせた彼の親友ケルナーに向つて、シルラーは一七九二年十二月二十一日に書送つてゐる「美の客觀的概念——それは自ら又趣味の客觀的原理となる所のもの——さうしてそれをカントが見出せないと絶望してゐる所のもの——を私は見附け出したと信ずる。Den objektiven Begriff des Schönen, der sich eo ipso auch zu einem objektiven Grundsatz des Geschmacks qualificirt, und an welchem Kant verzweifelt, glaube ich gefunden zu haben. それに就ての私の考を私は整理して、來年の復活祭迄には「カリアス、若しくは、美に就て」と題する對話篇として出版できるだらう」と。此著書は遂に現はれずにしまつたけれども、其の思想は一七九三年一月二十五日から同二月二十八日に亙るケルナーへの五通の書翰に於て(——及び其等に對するケルナ

ーの返書を通して、並にシルラーが當時イエーナ大學に於て爲した美學の講義の筆記錄に基いて―)吾々は之れを十分に窺ひ知ることが出來る。「カリアス書翰」(――詳しく云へば對話篇カリアスの實質を收めてゐるこの五通の書翰―)は「典雅と莊重」と共にシルラーの美學に關する最も重要なる文獻に屬する。――ヘーゲルがシルラーに對して「大なる效績」を認めたのも恐らく此書翰の、上に引いた個處に基いてのことであらうと推測される。(併し此點に就ては私は今確實な證據を擧げることができない)。フィッシャーの叙述に至つては、明瞭に此個處に基いてシルラーの效績を賞讃してゐるのであることが分かる。――吾々も亦「カリアス書翰」の價値を十分に認めるのであるが、恰もそれ故に、此書翰の豫告に於て、シルラーが誇を以て宣言してゐる所の「美の客觀的概念」の發見に對しては、驚きの眼を見ひらくのみである。

カントは、人の知る如く「判斷力批判」に於て(第十七節及び第三十四節參照)何が美であるかを概念に依りて規定する所の客觀的なる趣味規則なるものはあり得ない。何故ならば趣味からの判斷は盡く皆直感的 Aesthetisch である、換言すれば斯かる判斷の規定根據は主觀の感情なのであつて、或客觀的對象の概念ではないからである。確定的概念に依りて美の普遍的規準を提示すらゐ取り趣味の原理を搜索することは、

捜索されてゐる所のものが已に不可能なものであり、其自ら矛盾せるものであるが故に、不生産的勞力である。趣味に就ての客觀的原理はあり得ないと云つて居る。さうして、其意味は美の第二の契機からカントの與へた定義、卽ち美とは概念なしに普遍的に滿足を與へるものであると云ふことからして自ら明らかなことである。之に對してシルラーが美の客觀的概念――それは自ら又趣味の客觀的原理となる所の――を發見したと云つてゐる時客觀的objektivと云ふ所のものは、彼自らの言葉に依れば、それは「單に經驗的empirischではなくして、理性の性質から全然先天的に根據づけられるAus der Natur der Vernunft völlig a priori zu legitimieren こと」を指すのに外ならない。(一七九三年一月二十五日附書翰參照)。今私はシルラーが「客觀的」と美の概念に就て云つてゐる――さうして、實に區々なる意味で用ゐてゐる――)一々の個處を列擧する煩を避けるが、尙一つの個處に於て(一七九三年二月八日の書翰)シルラーは「主觀的原理を併し客觀的原理に移し更へることが出來る」das subjektive Prinzip doch ins objektive hinüber geführt werden kann と云つてゐるのを注目すべきものとして指摘して置かう。

ところで若し「理性の性質から全然先天的に根據づける」ことを以て――經驗的にと

云ふことに反するものとして――客觀的と云ふのであるならば、カントの爲した所は實に恰もシルラーが此所で要求してゐる意味に於て客觀的に美の概念を基礎づけたものと云はなければならない。カントが主觀的なる原理たる感情 Gefühl に於て美の原理を認めたことは、取りもなほさずそれは、理性の性質から全然先天的に、經驗的にでは少しもなくして、根據づけたものたるに外ないからである。若し又主觀的原理たる感情に依りて、換言すれば理性の、若しくは意識の、一つの能力の確立に依りて、美の法則性が(――經驗には關係なしに全然先天的に――)打立てられた時、それに依りて此能力の對象が生み出され、美的對象が創造されるのを指して其意味で主觀的原理が客觀的原理に移し更へられると云ふならば、それをカントは否定するのではない。少くとも原理に於て否定し得べきではない。其意味に於ての客觀的(美的)對象をカントは決して否定するのではない。寧ろ美的對象が自然的對象と倫理的對象とから特殊的に異なること、美的判斷が認識的判斷と道德的判斷とから異なること、自然と道德とから藝術が異なるものであることを確立しようがために、カントは美の――藝術の――原理を、客觀的ではない所の主觀的なる――知性ではなく意志ではない所の――感情に置いたのである。美に就て客觀的原理の不可能であることを繰り返

へし說いたカントは、シルラーの搜索しさうして發見したと(少くとも一時)信じた處の美の客觀的概念を實は打ち建て得た最初の(―殆んど唯一のとさへも云へる―)人なのである。シルラーの此驚くべき誤解は、併し恐らく、客觀的原理が不可能であると言明せるカントの美學に對して起つた最後のものでないであらう。所謂客觀的原理の否定は總じて學的基礎附けの不可能と同一視せられ易いからである。加之シルラーの場合に於ては、情狀酌量の餘地は十分にある。何故ならば、カントは自由美 freie Schönheit, pulchsitudo vaga と附庸美 anhängende Sohöuheit, pulchritudo adhaesens との區別を立てゝゐること依りて(判斷力批判第十六及十七節參照)純粹なる(自由)美は恰も純粹に主觀的であり、客觀的なる性質を少しも交へないかの如くに說いてゐる(―其所には明らかに、云はゞ態度の相異と對象の相異との混同が認められる―)からである。さうして又、カントは崇高を論じてゐる所に(第二十七節以下)崇高は唯吾々の主觀に於てのみ存するのであつて、自然の對象には存しないことを說き、對象としての崇高をば否定し去つてゐるからである。崇高なるものに(さうして又悲壯なるものに)最も强く心を惹かれてゐたシルラーがカントの此個所に對して特に思索を費やしたであらうと推測するのは大なる誤ではあるまい。(―[判斷力批判]に就てのシ

ルラーの研究が殊に此部分に傾注したことを推定せしむべき理由は色々擧げることができよう。後條シルラーの思想を叙述する所に於て吾々はシルラーの用語の主要なるものが「判斷力批判」の是等の部分から取り出されたことに氣附くであらう。美の對象性に興味を有するシルラーは恐らくは、崇高に對してカントが對象性を否定するのを疑はしく考へ、其點からして崇高と美との關係に、さうして引いて道德的と美的との關係に思索を進めたのであらう。此ことは後に述べる。又「主觀的原理が客觀的原理に移し更へられ得る」こと、換言すれば美の法則性を規定する原理としての能力の確立が從つて此(主觀的)能力によりて生み出される對象の(客觀的)原理を導き來ることは、カントの原理としては認めた所である。從つて此點を力說することは直ちにカントを超越することではあり得ない。併し此意味に於ての客觀的原理を、換言すれば對象性を、美に對して與へる仕事をカントは果して何處まで成し遂げたかは問題である。其處にシルラーの仕事の意味が認められるであらう。此ことは私の後に述べようとする所である。(―)いづれにせよ、一方に於ては、カントの學說に對する理解の困難と、さうして他方に於ては(―若しくは、その當然の結果として―)彼れの論述の上に認めらるゝ缺點と、此二つのものが、シルラーをしてカントを突破し

得たと信ぜしめるに與かつて力あつたかと思はれるのである。

上述の如くであるからしてシルラーが「カリアス書翰」に於て宣言してゐる「美の客觀的概念」の發見は單なる誤解に外ならない。クーノー・フィッシャー(及びヘーゲル)の解釋が正當なる根據を缺くものであることも從つて又自ら明らかであらう。シルラー自身も亦彼の所謂「美の客觀的概念」に依つてカントを突破しようとすることが唯誤解にのみ基くものなることを忽ちにして悟つたのであらう。彼自身も亦早く已に「美の客觀的概念」に就て語ることを止めてしまつたのである。此點に就てのシルラーの誤まらざる見解は、一七九四年十月二十五日ケルナー宛の書翰に於て極めて明確に述べられてゐる。„Die Erfahrung stellt eigentlich die Idee des Schönen gar nicht dar, oder vielmehr das, was man gewöhnlich als schön empfindet, ist gar nicht das Schöne. Das Schöne ist kein Erfahrungsbegriff, sondern vielmehr ein Imperativ. Es ist gewiss objektiv, aber bloss als eine notwendige Aufgabe für die sinnlich vernünftige Natur; in der wirklichen Erfahrung aber bleibt sie gewöhnlich unerfüllt, und ein Objekt mag noch so schön sein, so macht es entweder der vorgreifende Verstand augenblicklich zu einem vollkommenen, oder der vorgreifende Sinn zu einem bloss angenehmen. Es ist etwas völlig Subjektives, ob wir das Schöne als schön empfinden; aber objektiv

sollte es so sein." 之れこそ正當に云はれ得る美の「客觀性」である。(――クーノー・フィッシャーの解釋が誤まつてゐることを指摘若しくは論證せるものとして吾々は Otto Harnack, Die Klassische Aesthetik der Deutschen, 1892, Ergen Kühnemann, Kants & Schillers Begründung der Aesthetik, 1895. を擧げることが出來る。ハルナックは、シルラーの美學に三つの時期を區別し其第二期に「カリアス書翰」を配當して、之れをシルラーが「美の客觀的概念」の誤に囚はれてゐた時期と見做してゐる。S. 39―40. 併し私の見る所を以てすれば「美の客觀的概念」の誤解はシルラーの美學其自身に取つては左程重要な契機とはなつてゐない。此誤解はシルラーが純粹にカント學徒たることを少しも妨げてはゐないのである。此誤解は云ふ迄もなく實に驚くべきものではあるが、云はゞシルラーの思想の中心を遙かに隔つた緣邊に於て起つた出來事たるに過ぎない。此誤解に拘はらず「カリアス書翰」の美學はカントの本質を捕へてゐるのである。若しシルラーの美學に時期を分つとするならば、そは唯カント以前的とカント的との二期のみが區別せらるべきであらう。――シルラーの誤解が誤解でなければならぬことは、キユーネマンが最も能く之れを論じ盡してゐる。S. 80―87.――)

シルラーが捜索しさうして發見したと信じた「美の客觀的概念」は上述の如くに誤解の上に基いてゐる。併し「美の客觀的概念」としてシルラーが摘出し來つた所のものは實に天才的なる定義として驚嘆に價するものと云ふべきであらう。シルラーの與へた美の定義は「美とは「現象に於ける自由」Freiheit in der Erscheinung だと云ふのである(一七九三年二月八日ケルナー宛書翰。――乍序シルラーの著述の中には此定義は言葉通りには唯「美的教育」第二十三書の脚註の一個處に見えてゐる外見當らぬやうである)。

此定義が――假令シルラーはそれに依りてカントの主觀主義を突破し得たと誤り考へたとは云へ――決してカントの學說に反するものでないことは云ふ迄もあるまい。カントが美に客觀的原理を否定したのは云はゞ美を Charakteristik des Objektiven に依りて規定する事ができないと云ふに外ならない。さうしてシルラーが美とは「現象に於ける自由」であると定義するのは云はゞ Charakteristik der Objekte を規定するのである。美的對象の可能が基礎附けられるためには理性的原理が確立せられなければならない。美的對象の可能が基礎附けられた後に始めて吾々は斯かる對象の特徴に就て語ることが出來る。シルラーの仕事はカントの仕事の豫想と土臺と

の上に於て始めて可能なのである。事實シルラーの此「美的對象」の特徴の規定は、カントが第五十九節に於て象徴的描寫 symbolische Darstellung に就て述べてゐる所のものゝ徹底的展開に外ならない。さうして、美的對象を可能ならしめる理性能力に向ふ所の先驗哲學的興味よりも、寧ろより多く斯くして可能となつた美的對象に向ふ所の藝術哲學的興味に基いてゐるシルラーの述説は、カントに於て動もすれば隱れ易い(―若しくは、カントに於ては徹底されてゐない―)美の對象性に注意せしめ、さうして其所からして殊に道德的と美的との關係の上に極めて明瞭なる光を直射せしめる。吾々は先づ「カリアス書翰」に據つてシルラーの思想を叙述しよう。

總ての現象は吾々の表象に於て、表象力の形式的制約に從はなければならぬ。形式を吾々の主觀から受取らなければならぬ。何故ならば吾々の表象力からして形式を受取ることに依つて現象は始めて現象となるのだからである。あらゆる表象は雜多であり質料である。此雜多なるものゝ結合が形式である。質料を與えるものは感性であり、形式を與えるものは最も廣き意味で云ふ所の理性である。理性若しくは結合能力の現はれ方には主なるものが二つある。即ち表象と表象とを認識に向つて結合する所の理論的理性と、表象と意志とを行爲に向つて

結合する所の實踐的理性とである。理性の形式に斯く二つある如く、之各の形式に對して又それぞれ二つの質料がある。理論的理性が其形式を働らきかけしめる所の表象は、直接的(卽ち直觀)と間接的(卽ち概念)との二つに分類される。直觀は感性に依りて、概念は理性自身に依りて(但し感性の加入なしにではなく)與へられる　直觀に於ては、それが理性の形式と一致するか否かは偶然である。概念に於ては、それが理性の形式と一致するこゞは必然である。後者に於ては理性は自己の形式との一致を求めるのであるが、前者に於てはそれが見出される時理性は豫期せざるものに對する驚きを感ずる。それと同樣に、實踐的理性が其形式を働きかけしめる所の行爲にも二種類を區別することが出來る。卽ち自由なる行爲と自由ならざる行爲とである。自由なる行爲に向つて實踐理性の要求する所のものは、理論理性が概念に向つて要求する所のものと同じい。自由なる行爲が實踐理性の形式と一致することは、卽ち必然である。自由ならざる行爲が斯かる一致を示すことは偶然である。

理論的理性に依つて與へられたのでない所の表象(直觀)が、理性の形式に一致する場合には、吾々は之れを概念の模倣 Nachahmungen von Begriffen と呼ぶことができ

る。實踐的理性に依つて與へられたのでない所の行爲(自由ならざる行爲)が理性の形と一致する場合には、吾々は之れを自由なる行爲の模倣 Nachahmungen freier Handlungen と呼ぶことができる。兩者を共に理性の模倣若しくは理性の類似 Nachahmungen (Analoga) der Vernunft と呼ぶこともできよう。之に反して、概念は理性の模倣とは云へない。概念は理性に依るのであり、理性は自らを模倣するとは云へないからである。意志からの行爲も亦單に自由の類似ではあり得ない。本當に自由なのでなければならない。機械的行動(自然法に依りての行動)は、それとは異なつて、本當に自由とは云へない。唯自由に類似せるものとして評價されるだけである。

ところで、理論的理性は認識に向つて進む。與へられた對象を己れの形式の下に置く時、理論理性は其から認識が作られるかどうかを檢査するのである。換言すれば其對象が已に存する或表象と結び附けられるであらうか否かを檢査する。與へられた表象は概念であるか若しくは直觀であるかである。それが概念である場合には、それは其發生が已に理性に依るのであるからして、自から必然的に理性に關係せしめられる。此場合には已に存在せる關係が單に云ひ現はされるに

まる。例へば一つの時計は此の如き一つの表象である。吾々は此れを成り立たしめた所の概念に從つて評價する丈けである。理性は其際單に此與へられたる表象が概念であることを發見しさへすればそれでよい。それに依つて其表象が理性の形式と一對することは決定せられるのである。自然を論理的に評價する場合は皆それである。與へられたる表象が併し、直觀である場合、さうしてしかもそれが理性の形式と一致することが發見せられなければならぬ場合に於ては、理性は、此表象を理性に適ふものとして評價する爲めには、自己の爲めに、Constitutif にではなく regulativ に此表象に向つて理論理性に依つての起源を貸し與へなければならない。そこで理性は斯かる對象の中へ自分の方から一つの目的を入れて見る、さうして其對象が此目的に適ふであらうかどうかを評價する。合目的々に自然を評價する場合は卽ちそれである。論理的判斷の對象は合理性的 Vernunftmässigkeit であり、合目的々評價の對象は類似理性的 Vernunftähnlichkeit である。

實踐的理性は總ての認識から離れ、唯意志規定卽ち內的行爲のみに關係する。實踐的理性と云ふのと、單なる理性からの意志規定と云ふのとは一つ事である。

實踐理性の形式とは意志と理性の表象との直接的結合に外ならない。卽ちあらゆる他の規定原因の排除に外ならない。實踐理性の單なる形式に依りて規定せらるゝのでない所の意志は、自己以外のものから、實質的に、他律的に規定されるのである。さうであるからして、實踐理性の形式を模倣するとは、卽ち自己以外のものからではなく、自己自身に依りて規定されること、自律的なること若くは自律的と見ゆることに外ならない。ところで、實踐理性が其形式を働らきかけしめる所のものは、理論理性に取りて概念と直觀との二つがあつた樣に一つには理性に依れるもの卽ち自由なる行爲であり、一つには理性に依らぬ所のもの卽ち自然的行動である。實踐理性が其形式をそれへ關係せしめる所のものが意志的(自由なる)行爲である場合には、理性は單に其行爲をそれとして其儘規定する。總ての道德的行爲の場合はそれである。道德的行爲とは純粹なる意志の換言すれば單なる形式に依りて卽ち自律的に規定せられたる意志の、所產である。さうして理性が其行爲を斯かるものとして、換言すれば純粹なる意志の行爲として認識するならば、其時此行爲が實踐理性の形式に適へるものたることは云ふ迄もないことである。

もし若し實踐理性がそれへ向つて其形式を適用しようとする所の對象

依りて、實踐理性に依りて規定されたものでない場合には、實踐理性は之に對して、恰も理論理性が類似理性的なるものに對して爲す所と同じいことを爲す。即ち、其場合に實踐理性は其對象に己自らを規定する能力を、一つの意志を、貸し與へる。さうして對象の此意志の形式の下に對象を評價するのである。換言すれば實踐理性は此場合對象が對象自身の純粹意志(—それは實踐理性の純粹意志ではない、若しさうであるならばそれは道德的評價となるであらう—)に依りて彼のある所のものとなつてゐるのであるか、己自らを規定する力に依りてなつてゐるのかを評價する。

意志の行爲即ち道德的行爲に對しては、理性は其行爲が理性の純粹なる形式に依りて規定さるべきことを命令的に要求する。自然的行動に對しては、之は要求されない。併し斯かる行動が己自らに依つて規定さるゝこと、即ち自律を示すことを實踐理性は希求し得る。自然的行動が己自らに依つて規定されることは、決してそれが實踐理性に依りて規定されると云ふことではない。若し自然的行動が實踐理性に依りて規定されるならば、それは己自らに依つて規定されたとは云はれない、寧ろ自然より以外の理性に依りて他律的に規定されたのだと云はなけれ

ばならない。純粋なる自己規定が實踐理性の形式である。さうであるからして、理性的存在者が行動する時には、純粋なる自己規定を示すためには、純粋理性から行動しなければならぬ。單なる自然的存在者が行動する時には、純粋なる自己規定を示すためには、純粋自然から行動しなければならぬ。何故ならば理性的存在者の自己とは理性であり、自然的存在者の自己とは自然であるからである。それで、實踐理性が或自然的存在者を考察した時、其自然的存在者が自己に依りて規定されてゐることを發見するならば、理性は此自然的存在者に自由の類似 Freiheitähnlichkeit を、短かく云へば、自由 Freiheit を認める。併し此自由は單に理性からして對象へ貸し與へられたものである。超感性的なるものより他の何者も自由ではあり得ず、自由そのものは感性の世界には決して入り込み得ない。即ち此場合に於て對象は本當には決して自由なのではなくして、唯自由に見える frei erscheinen ことが必要なのである。或對象が實踐理性の形式に對して有する類似は、さうであるからして、實際に於ての自由ではなくして、單に現はれに於ての、現象に於ての、自由である、若しくは現象に於ての自律である。

以上の考察からして、評價の仕方に四種類あること、それに從つて表象さるゝ現

象にも四種類あることが分かる。

(一) 認識の形式に從つて概念を評價するのは論理的である。

(二) 同じ形式に從つて直觀を評價するのは合目的々である。

(三) 純粹意志の形式に從つて自由行爲(道德的行爲)を評價するのは道德的である。

(四) 同じ形式に從つて自由ならざる行動を評價するのは美的である。

さうして(一)認識の形式と概念との一致は合理性 Vernunftmässigkeit である。眞理、合目的性、完全は合理性の種々なる關係である。(二)認識の形式と直感との一致は類似理性 Vernunftähnlichkeit である。之れをシルラーは Teleophanie, Logophanie と名づけることも出來ると云つてゐる。(三)純粹意志と行爲との一致は道德性 Sittlichkeit である。(四)純粹意志若しくは自由と現象との類似は最も廣義に云ふ所の美 Schönheit である。

美とは、さうであるからして、現象に於ける自由に外ならない。(一七九三年二月八日ケルナー宛書翰參照)。

シルラーの此述説はカント美學の提要者としての彼の面目を最も能く示してゐる。蓋しシルラーは自ら云つてゐる如く(一七九三年二月十八日附ケルナー宛書翰)カントの語として彼の引いた「爾自身を爾自身から規定せよ」Bestimme Dich aus Dir selbst なる句を以て、カント哲學の眞髄と解し、さうして此自己規定の大なるイデーが自然の或現象に於て見出される時吾々は之れを美と名づけるのであると考へた。さうして此根本思想から彼は先づ第一に如何にして現象に於ける自由が吾々に依りて表象せられ得るかを明らかにするために技巧 Technik を説き、美の根基は現象に於ける自由であるが、美の表象の根基は自由に於ける技巧であることを説いて居る。「現象に於ける自由は美の根基である、併し此自由の表象の必然的條件は技巧である」Freiheit in der Erscheinung ist zwar der Grund der Schönheit, aber Technik ist die notwendige Bedingung unserer Vorstellung von der Freiheit. 換言すれば美の根基は現象に於ける自由である、美の衣象の根基は自由に於ける技巧である」Der Grund der Schönheit ist überall Freiheit in der Erscheinung. Der Grund unserer Vorstellung von Schönheit ist Technik in der Freiheit. 何故ならば自己規定としての自由は理性のイデーであるが故に如何なる直觀も此イデーに該當することはできない。直觀に於て、現象に於て、自由が吾々に依り表象せ

られ得るためには、さうであるからして、間接の途に依りて、換言すれば對象が自己以外のものからは規定せられて居らぬことに依りて、自己から規定せられてゐることを吾々に示すより外はない。然るに自己以外のものからは規定せられて居らぬことの、從つて自己から規定せられてゐることの表象は、唯其對象が規定されてゐることの表象に依りてのみ可能である。何等の意味に於ても規定せられて居らぬものに就ては其規定根基を考へることは不可能でなければならない。對象はそれ故に規定せられたるもの ein Bestimmtes でなければならない。又規定せられたるもの(歸結 Folge)に對して規定するもの(根基 Grund)を求める能力として悟性が其處に働かなければならない。規定せられたる對象の形式に就て悟性が省察することに依り、吾々は現象に於ける自由の表象に導かれるのである。悟性は併し規則なしに働くことができない。悟性が省察し得るために、對象は規則を容れる如き形を持つて居らなければならない。而して一定の規則に從つて生じたもの、一定の規則に基くものとして取扱はれ得る形とは、卽ち技術的 Kunstmässig 若しくは技巧的 technisch なるものに外ならない。對象に技巧的形式の認めらるゝことのみが、さうであるからして、悟性をして此一つの規定せられたる對象に對する規定根基を、此歸結に對する根基を

求めしめる所の機因を與へる。それ故に、自由は唯技巧の助けに依りてのみ感性的に描寫され得るのだと云へる。現象の世界に於て吾々が自由へ導かれるためには、技巧の表象が必要なのである。そは恰も意志の自由が因果律の助けに依りてのみ思惟され得るのと同じことである。換言すれば自由の消極的概念は、其反對なるものゝ積極的概念に依りてのみ考へることができる。斯くして、技巧は自由の表象の必然的條件である。さうして美の吾々の表象の根基は自由に於ける技巧であると云へる。何故ならば、技巧的形式に依りて吾々が、規定せられたるものに對して必然的に其規定根基を求むる時、而して其規定根基が對象自らより以外には見出されぬことを知る時、吾々は必然的に、外から規定せられてゐることの否定に依りて、自からに依り規定せられてゐることの卽ち自由の表象に導かれるからである。自由に於ける技巧 Technik in der Freiheit とは、技巧的形式の規定根基が對象自らに若しくは、嚴密に云へば、對象の形式自らに在ると云ふに外ならない。規則に從つてゐる形式を示す點に於て、そは技巧である、併しその規則が對象自らの中に在る點に於て、對象自らが自己に與へたものである點に於て、換言すれば對象が自己規定を示す點に於て、それは自由である。そこからして、シルラーは、美とは「技術性に於ける自然」Schönheit

ist Natur in der Kunstmässigkeit とも定義して居る。さうしてカントが「自然は藝術の如く見ゆる時に美であり、藝術は自然の如く見ゆる時に美である」と云つた(第四十五節)のを引いて之れを確かめて居る。(一七九三年二月二十三日の書翰)。

之に續いてシルラーは、先づ自然美に就て、次ぎには藝術美に就て、あらゆる美が現象に於ける自由、技巧に於ける自由、技術性に於ける自然なることを詳論して居る(「カリアス書翰」二月二十三日附及二月二十八日附)。又其所には吾々の學び得る多くのものがある。併し今私は之れを省略しよう。シルラーがカント學徒として、カントの美學の提要者として成し遂げてゐる仕事の輪廓は略明らかになつたと思ふからである。

然らば、シルラーが斯くカントの本質的なるもの摘出し、彼自身の思想として考へ通すことに依つて、彼は如何なる點に於てカントを徹底せしめたと云へるか。それを私は二つの點に約すことが出來るかと思ふ。その一つは、カントに於ては動もすれば分界線の見失はれ易い道德的と美的との關係を明確にしたことである。その

一つは美と崇高との、之れも亦カントに依ては其關係が動搖してゐる所の、二概念に對して決定的に安定を與へたことである。此二つの點は併し密接に聯關してゐる。美と崇高との關係の不安定が、實にカントに於て道德的と美的との關係を曖昧ならしめたと云へるからである。カントに於ては美は確かに眞と善とに對して換言すれば認識と道德とに對して其自らの純粹性が與へられた。併し崇高は殆んど道德的感情と混同されてしまつてゐるかにも見える。崇高が自然には其根基を有せずして唯吾々の理性のイデーに於て之れを有するとカントが云つてゐるのは、殆んど崇高が美的範疇に屬しないと斷定するのに等しい。加之、美に於てさへ、それが道德性の象徵とせられることに依りて、其純粹性に危險が、さうして、それが單なる自由美として附庸美から遠ざけられることに依て、其深さに危險が、迫つて居らぬとは云へない。シルラーは美の對象性を注意することに依り、美が純粹なる形式であることを注意することに依り、崇高が美の一つの範疇に過ぎぬことを注意することに依り、カントを純粹ならしめさうして美を純粹ならしめたと云へる。（一シルラーが此仕事を成し遂げるために、二個の誤解の途を通らなければならなかつたこと、さうしてカントに對する二の反撥を試みなければならなかつたことは、興味あることであ

る。一つの誤解とは前に述べた「美の客觀的概念」である。他の誤解とは曾て述べた（本誌五月號參照）「美的道德」である）。

美的對象を「現象に於ける自由」と定義することに依りて、シルラーは美の純粹性を善と眞とに對して確立することができる。感覺の世界に於ける、現象に於ける、自由なる點に於て美は實際の自由、純粹意志卽ち超感覺的なる善から區別せられる。さうして「現象に於ける自由」としての美は對象の自己規定であり、外からの何等の規定を受けぬこと、恰も道德的（自由）行爲が何等の實質的原因に依りての規定を受けぬのと同じ點に於て、學術的理論的認識の眞から區別される。對象の形式の根基が若し物理的力若しくは認識さるゝ目的に存するとするならば、存することを吾々が發見するとするならば、其對象は最早自由とは見られない。規定根基が其場合對象自らの中にはなくして、其れの外に在る。斯かる對象が美と云へぬとは、恰も目的からしての行爲が道德的と云へないのと同じである。如何なる理論的及び實踐的價値を有するか、如何なる質料より成立つてゐるか、又如何なる目的の爲めに存在するか其等のことは、趣味判斷が純粹であるためには、美的對象から全く抽除せられなければならない。美的に判斷する時、吾々は唯物が己自ら己自らに依つてあるのかを知らうとす

る丈けである。其論理的性質の如きは問ふ所でない。勿論規則性や合目的性が其儘美と矛盾すると云ふのではない。寧ろ美なる對象は規則に從つてゐるものでなければならぬ。併し目的や規則の働いたことが吾々に氣附かれるならば、それは强制として、他律として吾々に意識される。美的對象は、さうであるからして、規則的であつてもよいが、若しくはあらねばならぬが、規則から自由なるものと見えなければならないのである。然るに如何なる自然的對象も、況んや如何なる藝術的對象も、吾々がそれに就て思考することをするならば、何物も目的から自由に、規則から自由に、己自らに依りて規定されたるものはない。自律を有するものは何物もない。自律を有する唯一のものは現象の世界には求められぬ。若し併し吾々が理論的考察を捨てゝ對象を現はれのまゝに取るならば、面目は全く一新する。規則や目的は、概念であつて直觀でない故に、現象としては現はれ得ない。さうであるからして現象の(若しくは對象の形式の)根基を其形式以外に求める機因が吾々に與へられぬ限り、對象は自由なるものとして吾々に現はれる。美とは、それ故に、己自らを說明する形式であるとも云へる。美とは說明を要求せぬもの、若しくは概念なくして己自らを說明するものとも、、、、、其所からしてシルラーは之れを「感性的なるものゝ自律」Au-

tonomie des Sinn.　　も呼んで居る。（一七九三年二月十八日附書翰）

斯くしてシルラーは、美の純粹性を確保し得る自己の見地を他の美學說と比較して、カントのそれをも批評して次の如くに述べて居る。

「私の說は美を說明する第四の可能なる學說である。可能なる美學說の第一は感覺的主觀的 Sinnlich-subjektiv 例へばバーク E. Burke、第二の說は主觀的合理的 subjektiv-rational 例へばカント、第三の說は合理的客觀的 rational-objektiv 例へばバウムガルテン、メンデルスゾーン、ヴォルフ、及美を以て完全性に外ならずとする人々、さうして第四の說は感覺的客觀的 Sinnlichen-objektiv である。上の三つの學說もそれぞれ經驗の一部に適合し、眞理の一部を含むである。一部を以て全部と見做してゐる所に誤謬がある。バーク說はヴォルフ派に對しては、美の直接性、概念から獨立してゐることを認める點に於いて正しい。併しカント派に對して見れば、美を單なる感性の感受性に置く點に於て誤つてゐる。美を以て具象的完全性と見る合理派の說く所は、經驗に與へられる最多數の美が全然自由なる美ではなく、寧ろ總ての藝術作品がさうであり、自然美の大多數がさうであるやうに、目的の概念の下に立つてゐると云ふ事實から誤まられて、論理的善を美と混同するものである。カントは此困難なる點を解

くために、自由美と知性的美 Pulchritudo vaga und fixa; freie und intellectuirte Schönheit とを區別した。さうして、稍奇怪にも、目的の概念の下に立つ所の美は皆純粹ならざる美だと云つてゐる。アラベスク模樣の如きものゝ方が、さうだから美としては最高人間美よりも純粹だと主張してゐる。カントの此言は論理的を美的から區劃するためには大に役立つと考へられるが、併し實は美の概念を全然見誤まつたものと私は思ふ。何故ならば、美は其對象の論理的性質をも克服した時、最高の輝に於て現はれる。而して反抗のない所にどうして美は克服をすることができよう。全く形式なき質料に向つてはどうして美が形式を與へることができよう。私の少くとも確信する所に從へば、美は唯或一つの形式の形式たるものである。美の質料と吾々の呼ぶ所のものは必ず一つの形づけられたる質料でなければならない。完全性は一つの質料の形式である、之に反して美は此完全性の形式である。完全性の美に對するは質料の形式に對する關係である」。Denn eben darinn zeigt sich die Schönheit in ihrem höchsten Glanz, wenn sie die logische Natur ihres Objektes überwindet, und wie kann sie überwinden, wo kein Widerstand ist? Wie kann sie dem völlig formlosen Stoff ihre Form ertheilen? Ich bin wenigstens überzeugt, dass die Schönheit nur die Form einer Form ist, und dass das was mit ihren Stoff

nennt schlechtere[illegible] geformter Stoff sein muss. Die Vollkommenheit ist die Form eines Stoffes, die Schönheit hingegen is die Form dieser Vollkommenheit; die sich also gegen die Schönheit wie der Stoff zu der Form verhält. (一七九三年一月二十五日附書翰)'

此所でシルラーが美を形式の形式として見定めてゐることは最も注目に價する點である。之れに依りてシルラーは、カントが傾きかけてゐる所の美學上の形式說(—美の深さに危險を持來すもの—)の誤謬を、右に論じてゐるやうに、指摘し排除することができたのである。併し唯それ丈ではない。之れに依りて彼は又美的と道德的との關係に就てカントの中に見出さるゝ不徹底を徹底せしめることができたのである。(未完)